

## 終章 復興10年 たくましく前へ、長岡



長岡市は、中越大地震で大きな被害を受けたが、国内外の産官学民の多くの方々から支援を受け、復旧・復興の歩みを進めてきた。

犠牲者への追悼と支援への感謝を忘れず、コミュニティの大切さ、人と人との絆や縁、地域への誇りと愛着、自ら考え行動する大切さ、交流するおもしろさ、市民・支援者・行政が協働することにより生み出せる効果を感じながら地域づくりを進め、被害の大きかった中山間地域を含めて、地震前よりも活性化して復興10年を迎えた。

長岡市では、節目の年を迎え、市民と共に復興した姿を広く発信するとともに、被害の大きかった中山間地域の今後の地域づくりを見据えた取組みを行った。

一筆書きの看板にして、自然に調和する地域の象として、10月23日に「復興を祈る象」に制定しました。

## ～そのさきの未来へ～

### 市民の思いを結集して発信

復興活動団体と協働して「復興10年フェニックスプロジェクト推進会議」を立ち上げ、7・13水害や中越大震災から復興した長岡の姿が、東日本大震災の希望の光となるよう、さらに経験と教訓、感謝の気持ちを全国へ、次世代に引き継ぐために、これまで支援に取り組んできた各団体の活動をつなぐとともに復興への想いを共有、広く全国に向け発信した。

### 次の10年に向けて

中越大震災の復興過程で得られた経験、復興の取組みの成果を踏まえ、過疎化、高齢化が進む中山間地域の今後10年の地域づくりの方向性を検討するために「長岡市復興推進地域づくり委員会」を設置した。住み続ける地域づくりのビジョンとそれを実現するために必要な地域・支援組織・行政の連携体制などの考え方についての提言を得た。



## 1) 市民の思いを集結して発信

### 復興祈願花火フェニックスへの想い

フェニックス花火の打ち上げは、大震災に負けずに頑張っている中越地方の人々を元気付け、一日も早い復興を祈願してスタートした。

若い力を結集して手探りで始めたこの事業は、「みんなであげようフェニックス」を合言葉に、市民をはじめ多くの人々の善意が全国から寄せられた。

フェニックス花火に込められた、「追悼」や「感謝」などの数々の想いが見る者の感動を呼び、長岡まつり大花火大会を代表する花火としてその名を全国に轟かせている。

(※1)

【フェニックスプロジェクト】

平成16年に起きた新潟・福島豪雨(7.13水害)及び中越大地震から10年を迎える節目の年に、復興に取り組む団体と長岡市が協働し、長岡市の復興した姿を発信するために「復興10年フェニックスプロジェクト推進会議」を設立。

この会議で定めたキャッチフレーズやロゴマークを、営利・非営利を問わずコンセプトに合致する事業で活用できるようにしたことで、企業やNPOなどの多様な団体が一体となって、復興への思いを発信した。



【フェニックスプロジェクト始動】

### NPO法人復興支援ネットワーク・フェニックス

#### 願いは、子どもたちが誇りをもてるまち

中越大地震の発生から一か月半後の12月8日、仮設住宅56箇所クリスマスツリーが飾り付けられた。全国の青年会議所から支援をいただき、長岡市青年会議所の有志によって企画、実施された事業であった。

震災直後からの停電により暗くて寒い夜が続き、被災した人々から光とぬくもりを奪い、不安によって身も心も凍りつかせた。そんな中でのクリスマスイルミネーションによる「光」は被災した人々の心を和ませ、明日への希望の光となったと思います。この時の気持ちをNPO代表理事の樋口勝博さんはこう語っている。なお、この時のメンバーがその後に復興祈願花火フェニックス打上げ実行委員会をつくり、さらに「NPO法人復興支援ネットワーク・フェニックス」を結成。中越大地震からの復興に大きな役割を担うことになる。



樋口 勝博

平成17年、長岡市はこの年を「復興元年」と位置づけ、毎年8月2日と3日に震災からの復興と震災で亡くなられた方々の慰霊鎮魂を目的として開催される長岡大花火大会で全国からご支援いただいた皆様への感謝の気持ちと被災地域自らが復興への強い思いをこれまでに観たことも感じたこともない壮大な花火によって伝えたいと考えました。この時に、実行委員会の中心となったのが長岡青年会議所を中心とした青年有志たちであり、樋口さんはその一人でした。

8月2日、3日の夜、中越大地震直後、被災した人々の心よりどころとなっていた平原綾香さんの歌「Jupiter」にのせ、まさしくこれまでに観たことも感じたこともない壮大な花火が打ち上がり、長岡の夜空に「フェニックス」(不死鳥)が舞い降り、後に語り継がれるであろう伝説の始まりであった。

樋口さんは、「フェニックス花火は、〈みんなで上げよう！フェニックス〉を合言葉にご支援ご協力いただいた皆さんの花火です。全国からご支援いただいた皆様への感謝の気持ちと被災地域自らが復興への強い思いを表すとともに〈ひとりひとは小さな力であっても心ひとつにみんなが集まれば大きな力になる〉ことを実感させてくれます。」と話す、それを実現した原動力は何だったのか。

「フェニックス花火はまだまだ復旧・復興が進まない地震から10ヶ月後に打ち上げられましたが実行委員会設立当初は〈花火を上げるなんてとんでもない〉〈花火大会を中止し、自粛すべきだ〉〈花火打ち上げの費用は被災者に配るべきだ〉というご意見も多く、逆風はやむことはありませんでした。そうしたなかで頑張れたのは、〈米百俵の精神〉と長岡花火に込める先人たちの想い〈長岡魂〉が我々の心を支えてくれました。地域が危機に陥っている時に自らを犠牲にして後世の繁栄につくす、すぐには評価されることはなくとも10年、20年、100年先にこの長岡の子どもたちが誇りをもてるまちにしたいという先人たちの想いをつなぎ、受け止めたいと強く思いました。すべては長岡の先人たちのおかげです。」

中越大地震から7年後、東日本大震災が発生。大震災発生から5ヶ月後の8月に、甚大な被害を受けながらも長岡と同じく、花火への強い思いを込め、実施された岩手県石巻市の花火大会にて「ミニフェニックス花火」の打ち上げを支援している。

さらに長岡と歴史的につながりの深い会津若松市が基幹産業である観光において、修学旅行などの観光ツアーのすべてと言っていいほど、キャンセルが相次ぎ、風評被害に苦しんでいることを知り、会津若松のご当地グルメ「会津ソースかつ丼」のPRおよび農産物の安全性をPRするためのイベントや事業をおこなった。また、長岡市内の飲食店と協力し、福島より長岡市内の避難所で避難されている方々をお招きし、暖かなお食事でもてなす、「食」プロジェクトも実施するなどの被災者支援も行っている。中越大地震から10年<sup>(※1)</sup>が経過した平成26年10月、NPO法人復興支援ネットワーク・フェニックスでは「復興祈願花火フェニックス記念誌10年のキセキ」を刊行した。「時間と共に鮮明さが薄れていく記憶を、きちんと記録する必要がある」という思いから発刊したと言う。

## フェニックスプロジェクト

### コンセプト

亡くなられた方への「追悼」  
 全国からの支援に「感謝」  
 経験と教訓の「伝承」  
 復興した姿を全国へ「発信」

### キャッチフレーズ

復興10年 たくましく前へ、長岡  
 ～そのさきの未来へ～

### ロゴ



### 主な取り組み

#### Web、SNSによる情報発信



#### のぼり旗の掲示



#### ロゴの活用



### 各地域イベントの開催



7.13水害 献花・黙とう式  
 (平成26年7月13日)



震災10周年牛の角突き大会  
 (平成26年10月19日)



とちお同居会・半蔵金地区・IVUSA  
 震災10周年復興記念式典(平成26年10月25日)



ソングオブシアーズ2014(川口運動公園)  
 (平成26年10月23日)



法末集落 震災復興記念祭  
 (平成26年10月24日)



越後みしま 竹あかり街道  
 (平成26年10月25日)

## 2) 次の10年に向けて

### 復興推進地域づくり委員会

震災から10年を迎えるにあたり、中越大震災の経験と教訓、復興の取り組みの成果を踏まえ、今後10年間に於ける地域づくりの方向性を検討するため、平成25年12月に長岡市復興地域づくり委員会(委員長・澤田雅浩長岡造形大学准教授)を設置し、議論を開始した。

この委員会は、学識経験者のほか、中山間地域で復興や地域活性化の活動を実際に行っているNPO法人の代表などで構成されており、これからの地域づくりの方向性や住民・住民組織、行政機関などの役割及び連携体制について8回にわたって検討を行い、平成26年9月30日に報告書を市長に提出している。

#### 復興推進地域づくり委員会 検討経過

第1回(平成25年12月24日)	地域NPOの活動紹介 地域の現状に関する意見交換
第2回(平成26年1月27日)	地域の現状と課題の把握 地域NPOへのヒアリング結果確認
第3回(平成26年2月21日)	地域づくりの視点についての共通認識 復興で生まれた新たな活動の確認
第4回(平成26年5月2日)	具体的な地域の取り組みに関するアイデア出し 目指すべき中山間地に関する意見交換
第5回(平成26年6月2日)	これからの10年における地域ビジョンについて 地域ビジョンに対するキーワード整理と取組について
第6回(平成26年7月14日)	これからの地域づくりの方向性について 地域づくりの具体的な取組について 委員会報告書の項目について
第7回(平成26年8月11日)	これからの地域づくりのビジョン達成における仕組みについて 地域NPOの活動と地域内の連携について (公財)山の暮らし再生機構(LIMO)の活動と役割について
第8回(平成26年8月25日)	(公財)山の暮らし再生機構(LIMO)の役割について(再考) ビジョン達成のための地域連携の体制について

### 地域ビジョン(これからの方向性)

#### 地域づくりの基本的方向

復興で得た「知恵」や「仕組み」を活かして、  
過疎高齢化に適応する持続可能な地域づくりをめざす  
復興の「知恵」や「仕組み」

【地域の基盤】 共助コミュニティの強化 共感コミュニティの発生	【目標】 「民の公」の拡大による 自立と自律の地域経営	【推進体制】 住民による合意と 決定の仕組み	【サポート体制】 中間支援等を行う 外部組織の活用・連携
---------------------------------------	-----------------------------------	------------------------------	------------------------------------

#### これからの地域づくりのビジョンと展開イメージ

##### ラクラク・イキイキ暮らせてワクワクする地域をめざして

- ・過疎化、高齢化しても、ラクラク安心して暮らし続けられる地域の形成
- ・老若男女を問わず、だれもがイキイキ楽しく住み続けられる地域の形成

地域の魅力をワクワク感じて、交流や対流が生まれる地域の形成

##### ラクラク暮らせる地域

- ・雪対策や見守りなど安心・安全
- ・買い物や交通等の利便性の向上 など

住んでいる人、住んでみたい人が  
住み続けられる地域づくり

##### イキイキ暮らせる地域

- ・起業、コミュニティビジネス、  
子育て支援、移住環境整備 など

ラクラク・イキイキ暮らしながら、  
ワクワク感の生まれる活力のある地域の  
実現を目指す

地域の魅力を感じて  
ワクワクする地域  
(交流・対流の拡大、  
地域の魅力拡大など)

## 復興推進地域づくり委員会

# 震災をきっかけに、気付かされた地域の良さ

### ■ 気づかされた地域の良さ

この10年で中山間地域の良さを改めて気付いた人は多いと思います。これは震災で全国から支援に来た人が気付かせてくれたところがありますね。普段食べている料理だったり人の朗らかさだったり。都会の人がこの地域のありのままの暮らしを見て、その魅力の大きさに驚いたことで逆に私たちが気付かされたんです。

今度はその良さをさらに磨いて、支えてくれた人に「やっぱり長岡はいいところだな」って思い続けてもらえるようにしなきゃですね。

### ■ 復興10年で得たもの

長岡には、復興10年で得たいろんな蓄積があります。これまで地域復興支援員が被災地域に寄り添いながらその良さを引き出し、活動へとつなげるサポートなどをしてきました。地震をきっかけに、それらの地域住民は驚くほど活発になりました。これからは、震災で被害の大きかった地域だけでなく、他の地域にもそうした仕組みを展開していく、町、海、山の暮らしをより良くしていく必要があると思います。市外の人だけでなく、市民の交流だけでもお互いに刺激し合い地域の良さを引き立たせることはできます。もっと市民がいろいろな活動で市内各地域を行き来する機会が増えるといいですね。

### ■ 自分たちで活動する喜び

私たちは復興の経過の中で、市外の人と連携しながら、長岡を良くしていく方法を自分たちで考えて、自分たちでやってみることの面白さに気付きました。応援団も獲得したし、いろんなことができることがわかってきました。成功体験を踏まえて次の展開を考える積極性や、新しいものを受け入れる柔軟さも地域は持つようになりました。どうなるかわからないけれど、市民の自由な発想でやってみたら面白かったということが、この10年多かったんです。

復興10年を一区切りとして立ち止まらず、もう一度ふんどしを締め直し、自分たちがこの地域を輝かせている一人なんだと思って主体的かつ自立的に活動していくことが必要です。みんなでいろいろと話し合い、切磋琢磨しながら、地方都市のトップランナーとして走り続けましょう。



澤田 雅浩



【復興推進地域づくり委員会】

【澤田 雅浩】  
復興推進地域づくり委員会委員長  
長岡造形大学准教授

## 地域づくりの連携体制

「ラクラク、イキイキ暮らせて、ワクワクする地域」に向けた連携体制

